

青年期における現在および過去の祖父母との交流と祖父母機能

Adolescent grandchildren's present and past interaction with grandparents
and grandparenting functions.

田中真理^{1,2}・鎌田晶子³・秋山美栄子³

Mari TANAKA, Akiko KAMADA, Mieko AKIYAMA

要旨：本研究の目的は、現在と過去（中高生期，小学生期）の各時期の祖父母との交流が祖父母機能に及ぼす影響について検討することであった。短期大学生・大学生 179 名（19.09±.92 歳）のデータを用いて検討を行った結果，祖父母との交流は小学生期から中高生期，中高生期から現在へと継続的な影響を示した。また祖父母機能に有意な関連が見られたのは，現在の祖父母への自己開示と祖父母との関係のみであった。現在の自己開示が存在受容機能と時間的展望機能に直接影響し，さらに祖父母との関係を媒介して間接的に存在受容機能と日常的・情緒的援助機能に影響していた。一方，祖父母機能には交流頻度そのものや祖父母と親との関係は有意な影響を示さなかった。以上のことから，祖父母機能には量的な交流頻度ではなく，孫のコミュニケーションの深さや祖父母との関係といった質が重要であることが示唆された。

キーワード：祖父母—孫関係 共同行動 自己開示 世代間交流

問題と目的

近年，少子高齢化を背景に世代間交流への関心が高まっている。世代間交流は，高齢者の社会的孤立への対応や彼らの能力や経験の活用にとどまらず，中年世代にとっては高齢者への準備性を自覚させる機会，若年世代にとっては，支え，支えられることを認識できる貴重な体験となるなど（角尾・草野，2000），多世代にとって多様な効果をもたらすと考えられている。さらに，高齢者にとって子どもとのふれ合いが，被承認，高揚感，自己充足感といったポジティブ感情をもたらすだけでなく，身体的健康（村山・高橋・村山他，2014），さらには精神的健康（根本・渡辺・稲葉他，2018）と関連することが明らかにされている。一方若年世代にとっての高齢者との交流は，親密感を介した高齢者イメージの肯定化，援助行動への寄与（村山，2009），青年・成人のエイジズム態度の変容（Cakieux, Chasteen, & Packer, 2019），高齢者との協同実験課題における若年者の向社会行動の促進（Kessler, & Staudinger, 2007）等と関連するという報告がなされており，世代間交流の双方の世代における有効性に関する知見が蓄積されている。

世代間交流のうち，最も身近なものに祖父母と孫の交流があげられる。特に，高齢者の長命化や健康寿命の延伸などによって，次世代育成に果たす祖父母役割への期待は高

1 鹿児島県立短期大学生生活科学科

2 文教大学生生活科学研究所客員研究員

3 文教大学人間科学部・人間科学研究科

まっており、祖父母－孫関係や世代間関係は国際的にも関心の高いテーマのひとつとなっている（Buchanan & Rotkirch, 2018）。祖父母にとっては孫との交流が人生の意味の認識やストレス、抑うつ気分の低さと関連し（Park, 2018）、交流の喪失が祖父母のその後の抑うつ症状の悪化を招くなど（Drew & Silverstein, 2007）、孫との交流は祖父母にとって well-being やメンタルヘルスに関わる変数であるといえる。孫にとっても、祖父母との交流は祖父母との関係や祖父母像をポジティブにするだけでなく（Attar-Schwartz, Tan & Buchanan, 2009）、共感性や高齢者イメージ、高齢者への援助行動といった高齢者全般のイメージや心理社会的発達に寄与する可能性も示唆されている（村山, 2009）。しかし日本では、核家族化や都市化といった背景によって、家族の世代間交流の機会が減少傾向にある（e.g., 山崎・角間・草野, 2004）。事実、日本の三世同居の割合は2019年で9.4%と過去最低を更新し（内閣府, 2021）、日常的に家庭内で高齢世代と子ども世代が交流する機会は必然的に減少しつつあるといえる。このような社会背景を鑑みると、祖父母と孫の交流の質をいかに向上させるかは、重要な研究課題といえる。そこで本研究ではまず、祖父母と孫の交流について孫側の視点から検討を行う。

祖父母と孫の関係性を評価する概念のひとつに祖父母機能がある。田畑・星野・佐藤他（1996）は孫から見た祖父母の機能として、祖父母がいるだけで孫が安心できたり困ったときの拠り所になるという「存在受容」機能、孫のことを理解しようとしたり大目にするなどの「日常的・情緒的援助」機能、祖父母の姿を通して孫が一生や死について積極的に考える機会を持つ「時間的展望促進」機能、祖父母の姿から孫が祖父母や両親から引き継いだ類似性を認識する「世代継承性促進」機能の4機能を明らかにしている。その後も祖父母機能の構造についてはいくつかの報告がなされており、高校生を対象にした前原・金城・稲谷（2000）では「語り部・伝統文化伝承機能」、「安全基地機能」、「人生観・死生観促進機能」の3機能、女子青年を対象にした森本・中原（2011）は「基本的信頼機能」、「伝承機能」、「英知機能」、「自我発達促進機能」の田畑・星野・佐藤他（1996）の4因子と類似した祖父母機能を見出している。このように孫にとっての祖父母性には多様な存在意義が見いだされている。さらにこれら象徴としての祖父母機能はその後の孫の発達に影響する可能性が示唆されている。例えば大学生の孫の一般的な高齢者イメージを良好にし（福江・福岡・荒井, 2020）、自尊感情や自我同一性といった心理発達にポジティブな影響を及ぼす可能性（福江・福岡・荒井, 2020）や、自己受容を促進する（森下・上田, 2016）ことが明らかになっている。

ではこうした祖父母機能はどのように形成されていくのか。アムステルダム縦断加齢研究では、幼少期に祖父母との接触頻度が多く、共有する時間が長かった者は、成人しても祖父母をパーソナルネットワークの一員として挙げる頻度が高いことを報告しており（Geurts, van Tilburg, & Poortman, 2011）、幼少期からの交流がその後の祖父母との関係に引き継がれることが示唆されている。さらに児童期の祖父母との接触や会話、共有経験の頻度が一部の祖父母機能と関連を示したとの報告もある（柴田, 2015）。しかしながら、どの発達段階のどのような交流が祖父母機能に寄与するかについては明らかにされていない。前原・金城・稲谷（2000）は祖父母機能を検討するにあたり、祖父母との関係の発達の量的変化について検討する必要があると指摘しているが、祖父母と孫との世代間交流をより有益なものにするには、孫にとってどの時期のどのような交流が望ましいかを量・質とも

に検証していく必要がある。そこで本研究では、青年期の大学生を対象に、大学入学後の現在、中学生・高校生の時期（以下；中高生期）、小学生の時期（以下；小学生期）のそれぞれの時期における祖父母との日常的な交流が、祖父母機能に及ぼす影響について検討することを目的とする。

方 法

調査対象者と調査手続き

調査は2021年10月、九州と関東の短期大学生・大学生187名を対象に、web上の質問紙調査を実施した。調査依頼状ならびにweb上の質問紙の冒頭に、研究趣旨と倫理的配慮について説明する文章を記載した。具体的には、研究協力は任意であること、協力しないことによって何らかの不利益を被らないこと、データは数値化され統計的に処理されるため誰がどのように回答したかについて特定されることがないことを記し、回答の提出をもって調査協りに同意したとみなした。なお、本研究の調査手続きは鹿児島県立短期大学研究倫理審査部会の承認を得ている（承認番号：2021-7）。

提出された回答のうち、現在までに祖父母との交流経験が一度もないと回答した者、個人属性に不備のあったデータを除外した179名を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢は、 $19.09 \pm .92$ 歳で、女性141名、男性36名、性別無回答者2名であった。学年は1年生108名、2年生68名、3年生1名、4年生以上2名であった。なお、欠損値についてはペアワイズ除去を行って分析を行った。

調査項目

個人属性 年齢、性別（男性・女性・回答したくない）、学年について回答を求めた。

影響を受けた祖父母 福江他（2020）を参考に、自分の成長にあたって最も影響を受けたと感じている祖父母を一人選択するように求めた。回答選択肢は父方祖父・父方祖母・母方祖父・母方祖母であった。なお、これ以降の祖父母に関する設問にはここで選択した祖父母について回答するよう求めた。また、その祖父母の現在の状況（「元気に暮らしている」、「元気とは言えないが存命である」、「現在は亡くなっている」）と祖父母の年齢（「60歳代」、「70歳代」、「80歳代」、「90歳以上」、「わからない」）についても回答を求めた。

祖父母機能 田畑他（1996）の祖父母関係評価尺度 [孫版] を用いた。この尺度では、孫から見た祖父母の機能として、祖父母がいるだけで孫が安心できたり困ったときの抛り所になるという「存在受容機能」8項目、孫のことを理解しようとしたり大目にするなどの「日常的・情緒的援助機能」6項目、祖父母の姿を通して孫が一生や死について積極的に考える機会を持つ「時間的展望促進機能」8項目、祖父母の姿から孫が祖父母や両親から引き継いだ類似性を認識する「世代継承性促進機能」4項目の計26項目に対して「1：いいえ」、「2：どちらでもない」、「3：はい」の3件法で回答を求めた。またこの祖父母機能は亡くなった祖父母を対象としても同様の因子の再現性が確認されていることから（中里，2006）、本研究においても現在存命でない場合は存命中を思い出しながら回答するよう求めた。

祖父母との交流 祖父母との同別居状況、主なコミュニケーション手段、対面交流頻度、非対面交流頻度、共同行動、自己開示について、大学入学以降の現在（以下；現在）、中高生期、小学生期の3つの時期についてそれぞれ回答を求めた。なお、中高生期と小学生期については回顧法にて回答してもらった。同別居状況は、「同居」、「所要時間30分以内」、

「所要時間 1 時間以内」, 「所要時間 1 時間以上」の選択肢の中から当てはまるものを一つ選択してもらった。主なコミュニケーション手段では, 「直接会って話す」, 「電話」, 「メール」, 「手紙」からの選択肢の中から当てはまるものを複数選択してもらった。対面交流頻度と非対面交流頻度では, 「ほぼ毎日」, 「週 1 ~ 2 回」, 「月 1 ~ 2 回」, 「半年に 1 ~ 2 回」, 「年に 1 ~ 2 回」, 「ほとんどないから」の選択肢の中から当てはまるものをそれぞれ一つ選択してもらった。共同行動は, 「買い物」, 「食事」, 「旅行」, 「家事や手伝い」の 4 項目についてそれぞれ「1: ほとんどない (ほとんどなかった)」から「4: よくある (よくあった)」の 4 件法で, 自己開示は「自分のこと」, 「家族のこと」, 「大学 (学校) のこと」について「1: まず話さない (まず話さなかった)」から「4: よく話す (よく話した)」の 4 件法でそれぞれ回答を求めた。また現在の交流においてのみ, CODIV-19 の感染拡大によって祖父母との交流に変化があったかについて, 感染拡大前後で「交流は減った」, 「交流に変化はなかった」, 「交流は増えた」の選択肢から当てはまるものを一つ選択してもらった。

祖父母との関係 先行研究において祖父母機能と祖父母と両親との関連が指摘されていることから (Attar-Schwartz et al., 2009; 森本・中原, 2011; 杉井, 2006), 祖父母と親 (両親) との関係について項目を設けた。また, 村山 (2009) は祖父母との交流と祖父母や高齢者への評価の媒介変数として祖父母に対する主観的評価が関わっていることを明らかにしている。そこで, 祖父母と自分との関係についての項目もたずねた。これら 2 つの項目について, それぞれ「1: よかったとは言えないと思う」から「4: とてもよかったと思う」の 4 件法で回答を求めた。

調査項目の最後に, Web 調査におけるデータの重複回答を検出するための識別コードとして電話番号の下 3 桁の記入を求めた。本研究の分析には, IBM SPSS Statistics 25 と IBM Amos 25 を使用した。

結 果

尺度の因子構造の検討 祖父母機能の因子構造を確認するため, 確認的因子分析を行ったところ, CFI=.772, RMSEA=.074, AIC=685.260 と良好とはいえなかったため, 有意でない 2 項目 (「祖父 (祖母) は, わたしが何万円もかかるような大きな買い物をするとき, お金を出してくれる」, 「祖父 (祖母) の姿から, 人の死について, 考えてみることもある」) を削除した。さらに各下位尺度の内的整合性を検討するためクロンバックの α 係数を算出したところ, 「存在受容機能」は .80, 「日常的・情緒的援助機能」は .61, 「時間的展望促進機能」は .78, 「世代継承性促進機能」は .48 であった。「世代継承性促進機能」の α 係数の値が著しく低く内的整合性が認められなかったため, 下位尺度として含めるのは不適切と判断し, 本研究では「世代継承性促進機能」を除外することとした。残った 3 因子モデルで改めて確認的因子分析を行ったところ, 適合度は, CFI=.893, RMSEA=.060, AIC=356.470 となり, モデルの比較に有効とされる AIC 値が低くなったことから, 最終的に 3 因子モデルを採用した。

交流変数の一次元性の検討 共同行動と自己開示の両変数の一次元性を検討するために主成分分析を行ったところ, 「共同行動」の成分負荷量は現在が .52 以上 ($\alpha=.77$), 中高生期は .56 以上 ($\alpha=.77$), 小学生期は .61 以上 ($\alpha=.79$), 自己開示では現在が .91 以上 ($\alpha=.91$), 中高生期は .88 以上 ($\alpha=.89$), 小学生期は .91 以上 ($\alpha=.91$) であった。以上から, 各時期における両変数の一次元性と内的整合性が確認されたと判断した。

影響を受けた祖父母 影響を受けた祖父母に関する回答の内訳は、父方祖父が16名(8.94%)、父方祖母が47名(26.26%)、母方祖父が27名(15.08%)、母方祖母が89名(49.72%)であった。影響を受けた祖父母の現在の状況についての回答の内訳は、「元気とは言えないが存命である」が11名(6.15%)、「元気に暮らしている」が143名(79.89%)、「現在は亡くなっている」が25名(13.97%)で、年齢の内訳は60歳代が25名(13.97%)、70歳代が76名(42.46%)、80歳代が62名(34.64%)、90歳代が7名(3.91%)、わからないが9名(5.00%)であった。

各変数の記述統計 祖父母機能の各下位尺度、共同行動、自己開示、祖父母との関係の記述統計と相関係数をTable1に示した。祖父母機能の下位尺度はすべての交流変数と正の相関あるいはその傾向が認められた($r=.14-.55$)。祖父母との同別居状況、主なコミュニケーション手段、対面交流頻度、非対面交流頻度について、現在、中高生期、小学生期それぞれの度数をTable2に示した。主なコミュニケーション手段は、「対面」が小学生期よりも現在の方が有意に少なく($\chi^2(2) = 34.76^{**}$)、「メール」が現在の方が小学生期よりも有意に多かった($\chi^2(2) = 37.34^{**}$)。対面交流頻度は、現在の「ほとんどない($p < .01$)」、「年に1~2回($p < .05$)」、「半年に1~2回($p < .01$)」と小学生期の「週1~2回($p < .05$)」、「ほぼ毎日($p < .01$)」の度数が有意に多く、逆に現在の「週1~2回($p < .01$)」、「ほぼ毎日($p < .01$)」と小学生期の「ほとんどない($p < .01$)」、「半年に1~2回($p < .01$)」が有意に少なかった($\chi^2(10)=55.37^{**}$)。非対面交流頻度はいずれの選択肢でも回答に有意な偏りは認められなかった($\chi^2(10)=12.26, ns$)。

さらに時期別の共同行動と自己開示の差について、被験者内分散分析を行った(Table 3)。その結果、共同行動では、小学生期>中高生期>現在の順で有意に得点が減少しており($ps<.01$)、自己開示では、現在と中高生期の方が小学生期よりも有意に得点が高かった($ps<.01$)。

Table 1 各変数の記述統計と変数間の相関係数

変数	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 存在受容機能	2.26	.47	—									
2 日常的・情緒的援助機	2.71	.37	.53 **	—								
3 時間的展望機能	2.46	.49	.59 **	.35 **	—							
4 共同行動(現在)	1.82	.71	.23 **	.14 †	.34 **	—						
5 自己開示(現在)	2.72	.98	.48 **	.33 **	.43 **	.54 **	—					
6 共同行動(中高生期)	2.38	.76	.35 **	.21 **	.31 **	.63 **	.41 **	—				
7 自己開示(中高生期)	2.93	.89	.55 **	.30 **	.41 **	.39 **	.79 **	.48 **	—			
8 共同行動(小学生期)	2.70	.82	.18 *	.17 *	.24 **	.41 **	.29 **	.66 **	.30 **	—		
9 自己開示(小学生期)	3.01	.92	.38 **	.28 **	.31 **	.35 **	.67 **	.44 **	.80 **	.45 **	—	
10 祖父母と自分との関係	3.74	.54	.49 **	.47 **	.33 **	.19 *	.44 **	.17 *	.41 **	.06	.29 **	—
11 祖父母と親との関係	3.62	.63	.35 **	.28 **	.21 **	.05 **	.22 **	.10	.23 **	.08	.18 *	.47 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 2 時期別の祖父母との同別居状況，主なコミュニケーション手段，対面接触頻度，非対面交流頻度，COVID-19による交流変化の割合

	現在		中高生期		小学生期	
	度数	割合(%)	度数	割合(%)	度数	割合(%)
祖父母との同別居状況						
同居	11.00	6.15	24.00	13.41	22.00	12.29
別居(30分以内)	49.00	27.37	81.00	45.25	79.00	44.13
別居(1時間以内)	17.00	9.50	19.00	10.61	20.00	11.17
別居(1時間以上)	86.00	48.04	47.00	26.25	54.00	30.17
コミュニケーション手段						
対面	122.00	68.16	154.00	86.03	163.00	91.06
電話	86.00	48.04	75.00	41.90	72.00	40.22
メール	48.00	26.82	32.00	17.88	6.00	3.35
手紙	7.00	3.91	9.00	5.03	12.00	6.70
対面接触頻度						
ほとんどない	17.00	9.50	5.00	2.79	2.00	1.12
年に1~2回	23.00	12.85	13.00	7.26	15.00	8.38
半年に1~2回	54.00	30.17	38.00	21.23	27.00	15.08
月1~2回	41.00	22.91	47.00	26.26	48.00	26.82
週1~2回	14.00	7.82	33.00	18.44	38.00	21.23
ほぼ毎日	15.00	8.38	35.00	19.55	45.00	25.14
非対面接触頻度						
ほとんどない	44.00	24.58	47.00	26.26	62.00	34.64
年に1~2回	12.00	6.70	15.00	8.38	22.00	12.29
半年に1~2回	30.00	16.76	30.00	16.76	21.00	11.73
月1~2回	47.00	26.26	46.00	25.70	38.00	21.23
週1~2回	25.00	13.97	22.00	12.29	21.00	11.73
ほぼ毎日	5.00	2.79	10.00	5.59	11.00	6.15
COVID-19による交流変化						
交流が減った	80.00	44.69				
交流に変化はなし	83.00	46.37				
交流が増えた	1.00	.56				

Table 3 時期別の共同行動得点と自己開示得点の記述統計と分散分析結果

	現在		中高生期		小学生期		分散分析結果
	M	SD	M	SD	M	SD	
共同行動	1.83	.71	2.40	.76	2.69	.82	$F(2)=123.27^{**}, \eta^2=.44$
自己開示	2.74	.97	2.95	.89	3.02	.93	$F(2)=15.58^{**}, \eta^2=.01$

** $p < .01$

モデルの設定 過去および現在の祖父母との交流が各変数の影響を媒介して祖父母機能に及ぼす影響を検討するために共分散構造分析を行った。同一時期の各交流変数間に相関を、また小学生期から中高生期，中高生期から現在にそれぞれの各交流変数からパスを仮定した。祖父母との交流への交絡要因として同別居状況と COVID-19 感染拡大による交流の変化（交流の変化あり = 1，交流の変化なし = 0）が考えられたため，各時期の同別居状況はそれぞれの交流変数に，COVID-19 による交流の変化は現在の交流変数に対して，それぞれ統制変数として投入した。さらに，村山（2009）では祖父母との交流が祖父母に対する主観的親密性が，さらに Attar-Schwartz et al(2009)では祖父母と両親との関係が祖

父母との関係の質にそれぞれ影響することが報告されていたことから、祖父母との関係と祖父母と親との関係をそれぞれ媒介変数として設定し、両変数間に相関を仮定した。なお共分散構造分析では、過去から現在にかけての交流変数が祖父母機能に及ぼす影響を検討するため、死別等により過去及び現在の祖父母との交流変数に欠損があるデータを除外した136名のデータを用いた。上記のモデルにおいて、有意でないパスを削除しながら分析を繰り返した結果、最終的な適合度がCFI = .851, RMSEA = .066, AIC=1221.458となった。ただしこの時点で、祖父母と親との関係からのパス係数は祖父母機能に対していずれも有意ではなかったことから、祖父母と親との関係をモデルから除外したところ、適合度指標はCFI = .856, RMSEA = .064, AIC = 1137.218となり、モデル比較の指標であるAIC値が低下し適合度が改善したことから、最終的にFigure 1のモデルを採用することとした。

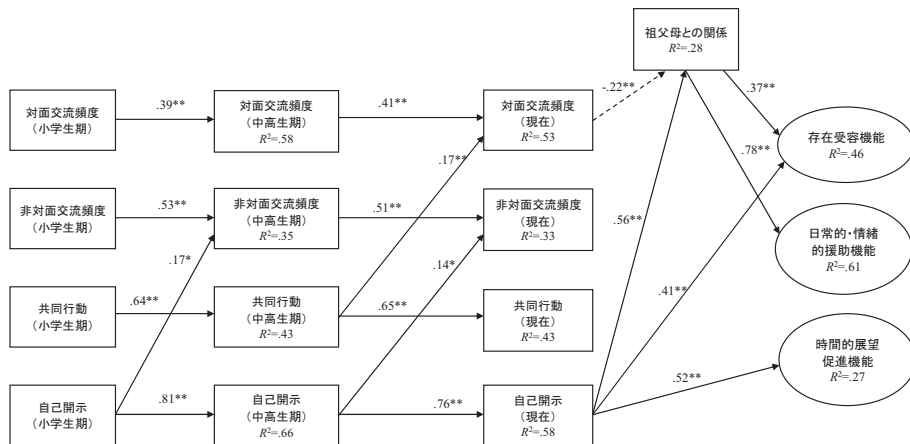


Figure 1 共分散構造分析の結果

注) 実線は正の関連, 点線は負の関連を示す。誤差変数と共分散は省略した。

同別居状況と COVID-19 による交流変化は統制変数として投入した。

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

影響を受けた祖父母と各時期の祖父母との交流の特徴

影響を受けた祖父母の内訳は、割合の多い順に母方祖母、父方祖母、父方祖母、父方祖父であり、母方祖母が最多であったという結果は、福江他 (2020) と一致するものであった。母方祖母への親密性や好意度の高さはアメリカでも報告されていることから (Eisenberg, 1988), 国内外問わず共通した見解であるといえよう。しかし前原・金城・稲谷 (2000) は同性である孫娘が母方祖母の安全基地機能や人生観・死生観機能といった祖父母機能をより高く評価することを明らかにしている。本研究では女性サンプルが全体の8割近くを占めていたことから孫の性別の偏りが影響した可能性もあり、また他の祖父母との比較検討も未検討である。今後は孫や祖父母の性差や統柄間も含めて検討していく必要がある。

祖父母との主なコミュニケーション手段では、小学生期よりも現在の対面交流頻度が減少しており、電話やメールなどの非対面による交流は現在の方が小学生期よりも多くなっていた。Sciplino & Kinshott (2019) は、質的研究によって幼少期は対面頻度が多く成人すると電話やインターネットを利用した接触に変化することを報告したが、本研究では量的な検討によってその一部を支持する結果となった。共同行動では、小学生期が最も頻度が高くその後年齢と共に減少していた。杉井 (2006) は、祖父母との共同行動に相当する項目 (例：一緒に外出をする) について、孫の年齢が低いほど同伴行動の機会が多いことを示しており、本研究でもそれと整合した結果となった。一方、祖父母への自己開示では、小学生期が中高生期や現在よりも低くなっていた。杉井 (2006) では、祖父母と孫との会話頻度 (例：二人きりで話をする) は孫の年齢差がなく、女子学生を対象とした柴田 (2015) でも大学生時と小学生期での会話の頻度には変化はなかった。ただし、小学校4年生から高校3年生を対象に自己開示を検討した Rivenbark (1971) は、自己開示の発達差と性差について、思春期から増加する友人への自己開示は性差が顕著でないものの、親への自己開示では性差が認められるとしている。すなわち、女子には学年差が認められないが、男子は中学校以降で一時的に女子よりも有意に低下したことを報告している。本研究では、開示対象は親ではなく祖父母であるため直接比較することはできないが、家族への自己開示は女性の方が男性に比べて多いという知見が他にも存在しており (榎本, 1987; Papini et al, 1990), 女性が多い本研究の対象者では、祖父母への自己開示が維持されたものが残った可能性はある。この点については、性差を含めたより詳細な検討が求められる。

対面・非対面交流、共同行動、自己開示は、小学生期から中高生期、中高生期から現在へと独立してそれぞれの変数に影響していたことから、児童期からの交流が継続して現在の交流に関わっていることが示された。また、小学生期と中高生期の自己開示がそれぞれ次の時期の非接触交流頻度に影響しており、祖父母に話をする、話を聞いてもらうという関係性の構築が成長後のメールや電話などでのやり取りの頻度を高めたと考えられる。また中高生期の共同行動は現在の対面交流頻度と関連していたが、これは思春期にあたる中高生期であっても一緒に行動する機会を持つという関係性だけでなく、習慣を含めた生活環境、家庭環境などの環境要因も関連していると考えられる。一方、現在の対面交流頻度は祖父母との関係を悪化させていた。杉井 (2006) は、高校生と大学生では母方祖母への親近感が同居よりも別居の方が高く、中学生・高校生では父方祖母への親近感が同居よりも別居の方が高い傾向にあったことから、多感な時期での同居祖父母からの関与が親近感には負の影響を及ぼすことを示唆している。村山 (2009) も祖父母と同居して日常的に高齢者と接触している子どもの方が、別居している孫よりも高齢者への好ましさのイメージが否定的であったことから、同居の孫はより現実的な高齢者イメージを抱いていると考察している。本研究では同別居状況を統制してもなお対面交流頻度が祖父母との関係がネガティブになっていたことから、祖父母との良好な関係には、常に顔を突き合わせるという関係ではなく、適度な距離感を保った交流が望ましいことが示唆されたといえる。

祖父母機能には交流頻度や共同行動は直接有意な影響を示さず、自己開示と祖父母との関係のみが一部の祖父母機能に関連していた。存在受容機能には、現在の自己開示のみが直接寄与し、さらに祖父母との関係の良好さを媒介して間接的に影響を示した。存

在受容機能は、心の支えや頼りになる、見捨てない、親との間をとりもつなど、祖父母が親からの保護的な場となり孫の安心感につながる機能（田畑他，1996）である。尺度項目には「親には言えないことでも祖父（祖母）に話せることがある」という自己開示そのものに関わるものも含まれており、本研究によって存在受容機能の高さの背景に存在する祖父母との信頼関係の前提が実証されたといえる。祖父母からの気づかいや関心の高さ、寛容さを意味する日常的・情緒的援助機能（田畑他，1996）には、交流頻度からの直接的な影響は認められず、祖父母との関係を通じて間接的に影響を受けていた。この機能は、気遣う、理解しようとしてくれる、親代わりとなるなどサポート源としての機能が含まれており、孫にとって祖父母がサポート源であるという認識の有無が関わっている。したがって、祖父母との交流頻度やコミュニケーションそのものではなく、祖父母との良好な関係によって支えてもらっているという感覚が影響したと考えられる。時間的展望促進機能には、現在の自己開示のみが直接影響を示していた。時間的展望機能は、祖父母の姿を通して孫が一生や死について積極的に考える機会を持つ等の内容（田畑他，1996）が含まれる。中里（2006）は、時間的展望機能の高さには、孫が祖父母との対話を通して祖父母の生き方を自己の人生観に統合するといった双方向の能動的なコミュニケーション形態を想定している。本研究では、祖父母から孫への自己開示については未検討であるものの、少なくとも青年の自己開示によって生じる祖父母からの応答やコミュニケーションを通じて、祖父母の考え方や価値観に触れ、人生観や死生観を客観的に学ぶことにつながっているのではないかと考えられる。さらに時間的展望機能は祖父母の関係の影響が認められなかったことから、祖父母と自分の関係のよしあしに関わらず孫の時間的展望において祖父母との自己開示をはじめとした対話が貴重な機会となりうることが示唆された。特に時間的展望促進機能は、大学生自身の自尊感情や高齢者のポジティブなイメージと関連性が認められており、孫の発達という観点から祖父母が果たす役割の中心的部分として一定の重要性が認められている（福江他，2020）。今回は祖父母からの自己開示については検討することができなかったが、少なくとも孫から祖父母へ話をする機会を設けることは、青年自身が生きて後の人生や老い、未来展望を抱くといった観点から重要であるといえる。最後に、祖父母機能と親との関係の関連についていくつかの先行研究で指摘されていたが（Attar-Schwartz et al., 2009；森本・中原，2011；杉井，2006）、本研究で検証したモデルでは祖父母と親との関係は祖父母機能に有意な影響を示さなかった。本研究では、両者の相関係数は有意であったため、祖父母と自分との関係を統制して祖父母と親との関係と祖父母機能の相関係数を算出した結果、存在受容機能のみが有意となり（ $r=.16, p<.05$ ）、日常的・情緒的援助機能（ $r=.08, ns$ ）、時間的展望促進機能（ $r=.07, ns$ ）はいずれも有意な関連を示さなかった。逆に親と祖父母の関係を統制変数として自分と祖父母の関係と祖父母機能の相関係数を算出した結果、いずれの機能とも有意な関連が示された（ $r=.28-.41, ps<.001$ ）。本研究は横断的調査ではないものの、少なくとも大学生を対象にした回顧的な祖父母機能においては、祖父母と親との関係よりも、祖父母と自分との関係が祖父母機能に影響するといえそうである。以上のことから、祖父母機能には、過去ではなく現在の、そして交流頻度そのものではなく、コミュニケーションの質や祖父母との関係の良好さが影響することが明らかになった。

本研究の課題としてはまず、本研究で検証したモデルの因果関係の方向性の設定の問題

がある。祖父母機能は、幼少期からの関係性の継続性の中で醸成されていくものであり、祖父母機能が高まるからこそ交流が促進されるという双方向性も考えられる。また先行研究において同性の祖父母にそれぞれ独特の祖父母機能が付与されるという指摘もことから（前原他，2000），続柄間や性差についても詳細に検討していく必要がある。さらに今回は小学生期や中高生期について回顧法を用いたが今後，横断的・縦断的に本研究の結果の妥当性を再検討することが求められる。最後に，今回は孫側の一方による検討に留まったが，孫-祖父母の二者間の相互作用についてダイアドレベルで検討していくことで，より質の高い世代間交流のプロセスを明らかにすることが期待される。

付記

本研究は，2021年度文教大学大学院共同研究費の助成を受けて実施された。また調査にご協力いただいた短期大学生・大学生の皆様深く感謝申し上げます。

引用文献

- Attar-Schwartz, S., Tan, J.P., & Buchanan, A. (2009) Adolescents' perspectives on relationships with grandparents: The contribution of adolescent, grandparent, and parent-grandparent relationship variables. *Children and Youth Services Review*, **31**, 1057-1066.
- Buchanan, A., & Rotkirch, A. (2018) Twenty-first century grandparents: global perspectives on changing roles and consequences. *Contemporary Social Science*, **13**, 131-144.
- Cadieux, J Chasteen, A. L., & Packer, D. J. (2019) Intergenerational contact predicts attitudes toward older adults through inclusion of the outgroup in the self. *Journals of Gerontology: Psychological Sciences*, **74**, 575-584.
- Drew, L. M., & Silverstein, M. (2007) Grandparents' psychological well-being after loss of contact with their grandchildren. *Journal of Family Psychology*, **21**, 372-379.
- Eisenberg, A. R. (1988) Grandchildren's perspectives on relationships with parents: the influence of gender across generations. *Sex Roles*, **19**, 205-217.
- 榎本博明（1987）青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**, 91-97.
- 福江里美・福岡欣治・荒井佐和子（2020）過去の祖父母機能が大学生の心理的発達と高齢者イメージに及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, **30**, 95-107.
- Geurts, T., Van Tilburg, T. G., & Poortman, A. R. (2011) The grandparent-grandchild relationship in childhood and adulthood: A matter of continuation? *Personal Relationships*, **19**, 267-278.
- Kessler, E-M. & Staudinger, U. M. (2007) Intergerational potential: Effects of social interaction between older adults and adolescents. *Psychology and Aging*, **22**, 690-704.
- 前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝（2000）続柄の違う祖父母と孫の関係 教育心理学研究, **48**, 120-127.
- 森本美奈子・中原純（2011）女子青年における祖父母機能認知：一続柄および関係性からの検討— 日本心理学会大会発表論文集, **75**, 1PM020.
- 森下正康・上田佳乃（2016）祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, (12), 135-144.

- 村山陽 (2009) 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 社会心理学研究, **25**, 1-10.
- 村山陽・高橋知也・村山幸子・二宮知康・竹内瑠美・鈴木宏幸・野中久美子・深谷太郎・谷口優・西真理子・新開省二・藤原佳典 (2014) 高齢者における「世代間のふれ合いにともなう感情尺度」の作成の試み—高齢者の心身の健康との関連— 厚生指標, **61**, 1-8.
- 中里和弘 (2006) 青年期における祖父母との死別に関する研究 (第2報): 死別反応とその関連要因 (性格特性, 故人の生前の機能) についての検討 生老病死の行動科学, **11**, 21-29.
- 内閣府 (2021) 令和3年版高齢社会白書全体版
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html (2021年12月12日検索)
- 根本裕太・渡辺修一郎・稲葉陽二・藤原佳典・倉岡正高・野中久美子・田中元基・村山幸子・松永博子・安永正史・小林江里香・村山洋史 (2018) 若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連 日本公衆衛生雑誌, **65**, 719-729.
- Panini, D. R., Farmer, F. F., Clark, S. M., Micha, J. C. & Barnett, J. K. (1990) Early adolescent age and gender differences in patterns of emotional self-disclosure to parents and friends. *Adolescence*, **25**, 959-976.
- Park, E. H. (2018) For grandparents' sake: the relationship between grandparenting involvement and psychological well-being. *Ageing International*, **43**, 297-320.
- Rivenbark, W. (1971) Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, **28**, 35-42.
- Sciplino, C., & Kinshott, M. (2019) Adult grandchildren's perspectives on the grandparent-grandchild relationship from childhood to adulthood. *Educational Gerontology*, **45**, 134-145.
- 柴田雄企 (2015) 孫からみた祖父母: 祖父母との交流と祖父母機能 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, **53**, 1-9.
- 杉井潤子 (2006) 祖父母と孫との世代間関係—孫の年齢による関係性の変化— 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), **55**, 177-190.
- 角尾美果・草野篤子 (2000) 高齢者をめぐるストレスと世代間交流のすすめ 老年精神医学雑誌, **11**, 1372-1379.
- 田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 (1996) 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成 心理学研究, **67**, 375-381.
- 山崎美佐子・角間陽子・草野篤子 (2004) 異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から— 信州大学教育学部紀要, **112**, 99-110.

